

子どもの授業参加行動を促す 言葉かけのあり方について

学籍番号 249221
氏 名 武藤奈央
主指導教員 四辻伸吾
副指導教員 庭山和貴

1. 問題と目的

通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童は増加傾向にあり、学級内には多様な支援ニーズが同時に存在している。その結果、担任には個別対応と集団指導の両立が求められ、学級経営や授業運営に大きな負担が生じている。インクルーシブ教育の理念に基づき、通常学級においても児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた個別支援を組み込むことが重要であるとされている。先行研究では、授業参加が学習成果や学習意欲、自己効力感と密接に関連しており、参加しやすい学習環境や心理的安全性の確保が重要であることが示されている。中でも教師の言葉かけは、児童の安心感や承認感を高め、授業参加を促進する有効な支援手段であると報告されている。一方で、言葉かけの効果は内容やタイミング、受け手の受け止め方によって左右されるため、肯定的かつ適切な関わりが求められる。本研究では、授業参加が困難な児童を含む学級において、児童が求める教師の言葉かけの特徴を明らかにし、それを授業実践に取り入れることで学級全体の授業参加行動の変化を検討することを目的とした。研究1では児童への質問紙調査により言語的支援の特徴を整理し、研究2ではその結果を踏まえた授業実践を通して授業参加率の変化を検証する。

2. 研究に至るまでの経緯

基本学校実習において、特定の児童（A児）を対象に、ABC分析の枠組みを用いて授業場面および生活場面での行動観察と個別支援を行った。ABC分析とは、行動の直前の状況、行動、直後の結果を整理し、行動の機能を仮説化する行動評価手法であり、教育現場においても問題行動の低減や学習参加の促進に有効であるとされている。実習では、A児の授業不参加行動や掃除場面での不参加行動を分析した結果、いずれも課題回避の機能が共通して認められた。そこで、課題の細分化、具体的な指示、心理的負担を軽減する言葉かけ、共同性や楽しさを取り入れた支援を行ったところ、A児は段階的に課題へ向かう行動を示すようになった。これらの結果から、行動そのものを制止するのではなく、行動の機能を踏まえた支援が有効であることが示唆された。一方で、実習を通して、学習参加の困難さは児童個人の特性のみならず、周囲の児童や教師との相互作用、学級内の雰囲気といった環境要因とも関連している可能性が観察された。以上のことから、個別児童への支援に加え、学級全体における授業参加の在り方を検討する必要性があると考え、本研究では学級全体を対象とした授業参加行動の変化を検討することとした。

3. 研究1

研究1では、児童が授業参加行動を示した際に望ましいと感じる言葉かけおよび、授業不参加行動が生じやすい場面において授業参加を促す言葉かけの特徴を明らかにすることを目的とした。実習校の5年生102名を対象に、自由記述式アンケートを実施し、発表場

面、学習困難場面、グループ活動場面など計4場面を設定して、望ましい教師の言葉かけについて回答を求めた。得られた回答は、「賞賛」「励まし」「挑戦的促し」「助言」「禁止・注意」の5カテゴリに分類し分析を行った。

その結果、授業参加行動が見られた場面では、成果のみならず努力の過程や成長を評価する言葉かけ、さらに今後の学習継続を期待する言葉かけが多く挙げられ、児童が過程や変化を認められることに価値を感じていることが示された。発表や学習困難など不参加が生じやすい場面では、「間違えても大丈夫」「一緒に考えよう」などの情緒的支援や受容的な関わりを示す励ましが多く、児童の不安を軽減する言葉かけが強く求められていることが明らかとなった。また、その上で行動を後押しする挑戦的促しや具体的な助言が有効であることが示唆された。一方で、禁止や強制的な注意に該当する言葉かけは全体として少数であり、授業参加の促進には否定的表現よりも受容的・支持的な関わりが重要であることが示された。以上より、授業参加を支える言葉かけとして、まず安心感を保障した上で思考や行動を促す段階的な関わりが重要であると考えられ、次章の授業実践へとつなげることとした。

4. 研究2

研究2では、研究1で得られた言語的支援の特徴を授業場面に取り入れ、学級全体および各児童の授業参加行動への効果を検討した。実習校5年生1学級34名を対象に、ベースライン期と介入期を設定し、授業中の参加行動をタイムサンプリング法により記録した。授業参加行動は、課題への取り組み、教師や児童の話を聞く姿勢、発表行動など、当該場面で求められる行動と定義した。介入期には、研究1の知見を踏まえ、安心感を基盤としつつ授業参加を促す個別の言葉かけと、参加行動が見られた際の積極的な賞賛を行った。その結果、学級全体の授業参加率はベースライン期の約70%前後から、介入期には80～90%台へと上昇し、高い水準で安定して推移した。また、各児童の授業参加率に着目すると、特にベースライン期に参加率が低かった児童において顕著な改善が見られ、参加率の分布は高い水準に集中した。一方で、もともと参加率が高かった児童の水準も維持されており、学級全体の底上げが図られたことが示唆された。さらに、言葉かけ回数の分析から、授業参加が不安定であった児童を中心に支援が重点的に行われており、児童の状況に応じた選択的な言語的支援が実施されていたことが確認された。以上より、本研究で実施した言葉かけによる支援は、低参加児の授業参加行動を促進するとともに、学級全体の授業参加行動の安定化に寄与する可能性が示された。

5. 総合考察

本研究では、通常学級における授業参加行動を支える教師の言語的支援に着目し、授業参加を促す言葉かけの特徴と、それを基盤とした実践の効果について検討した。研究1の結果から、授業参加を支える言葉かけとして、否定を避け、努力の過程や成長を認めるとともに、児童に安心感を与える受容的な関わりが重要であることが示された。特に、授業不参加が生じやすい場面では、不安や抵抗感を軽減し、参加への心理的ハードルを下げる言語的支援が求められることが明らかとなった。研究2では、これらの知見を踏まえた言語的支援を授業場面で実施した結果、学級全体の授業参加率が向上し、高い水準で安定して推移する傾向が認められた。とりわけ、ベースライン期に授業参加率が低かった児童において顕著な改善が見られ、学級内の個人差が縮小する傾向が示された。一方で、参加率の高かった児童の水準も維持されており、本支援が学級全体の授業参加行動の底上げに寄与する可能性が示唆された。

以上より、授業参加を支える言語的支援は、特定の児童のみを対象とするものではなく、学級全体の学習環境を整える働きをもつことが示された。また、本研究で扱った支援は特別な教材や時間を必要とせず、日常の授業実践に取り入れやすい点において実践的意義が高いと考えられる。ただし、本研究は1学級を対象とした短期間の実践であり、外的要因の影響も統制していないため、今後は対象や期間を拡大した検討が求められる。